

2023年度第36回ヴェリタス祭のご案内

第36回ヴェリタス祭は2023年11月3日(金・祝)、11月4日(土)の二日間にわたって対面開催されます。同窓会では、卒業生同士の親睦および交流の場として、両日とも2号館4階にティールームをオープンいたしますので、ご休憩、ご歓談の際には是非お立ち寄りください。皆さまのお越しをお待ちしております。

※諸事情によりティールームは11月3日(金)のみの開設となる場合もございます。
その際は以下同窓会ホームページに掲載いたしますので、ご来場の前に念のためご確認ください。
同窓会ホームページ <https://www.seig-dousou.com/>

聖学院大学同窓会 定期総会のご案内

以下の通り定期総会を開催します。
ご多忙とは存じますが、ご出席の程よろしくお願いいたします。

日時: 2023年11月3日(金・祝) 11:00~12:00

場所: 聖学院大学7号館7101教室(当日会場の都合により変更となる場合がございます)

議案 ●2022年度活動報告 ●2022年度決算報告 ●2023年度事業計画(案)
●2023年度予算(案) ●質疑応答

※当日はヴェリタス祭開催中のため、お車でのご来場につきましてはご遠慮下さいますようお願い申し上げます。



聖学院大学同窓会役員募集

聖学院大学同窓会では活動にご協力いただける役員を募集しております。活動内容は毎月行われる定例役員会(都内にて)への出席、年1回の定期総会の開催、会報誌の発行、ホームページの運営等があります。活動にご興味のある方は下記アドレスにお名前、学籍番号、電話番号及びメールアドレスを記入して送信下さい。役員会の見学希望だけでも構いません。

聖学院大学同窓会メールアドレス
(尚、お返事にお時間頂く場合がありますがご了承ください)

dousou@seigakuin-univ.ac.jp

皆様のご参加を心よりお待ちしております

ご住所等を変更される場合には、同窓会ホームページの「お問い合わせフォーム」より変更手続きをお願いいたします。



聖学院大学同窓会会報誌『クロスポイント』第33号
令和5年10月19日発行
〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 聖学院大学同窓会事務局
E-mail dousou@seigakuin-univ.ac.jp
URL <https://www.seig-dousou.com/>

CROSS POINT



Cross Talk 小池学長 × 島田会長・羽田野副会長

同窓生一人ひとりが、聖学院大学ブランドの
形成者であるという自負を持って。

SEIGAKUIN 120th anniversary



Cross Talk

同窓生一人ひとりが、 聖学院大学ブランドの 形成者であるという自負を持って。



2022年11月に開催された学校法人聖学院理事会で学長に選任された小池茂子先生。ご専門は成人教育学、生涯学習論。聖学院大学としては初となる女性学長となられた小池先生にコロナ禍後のキャンパスの様子、新学長としての抱負、創立120年を迎えた学校法人聖学院の記念事業、さらには地域連携や卒業後の学習機会について伺ってみました。

*インタビュー中は「コロナ」と略した表現を用いています。この対談は2023年8月1日に行われました。

§1 小池学長のプロフィール

島田 先生は人間福祉学部そして人文学部の教授として教壇に立たれておられましたので、同窓生の中には直接先生に教えを授かった方も少なくないかと思いますが、先生がどんな経緯で本学に招かれたのか、どんなキャリアを積まれてこられたのかを知るものはあまり多くないかと存じます。そこで、まずは先生のこれまでの歩みをお聞かせいただけますか。

小池 私は静岡県焼津市に生まれまして、実家は遠洋マグロ漁船の網元で、キリスト教とは無縁の家に育ちました。父は、私が小学生になる

頃からは祖父から引き継ぐ形で会社経営に専念しましたが、若い頃は船員として世界の海に出かけていました。どういう風にして魚を獲ってくるかとか、嵐の中で船長として自分の船をどう守ったかとか、父が語ってくれたことを当時は楽しい話として聞いておりましたが、今は父が多くの苦勞を負っていたことに思いが及びます。

羽田野 キリスト教に触れられたのはいつ頃からなのですか？

小池 小学校6年生の時に、親友が「静岡英和女学院というキリスト教のプロテスタントの中高一貫校の女子校に進学したいので一緒に行きませんか」と誘ってくれ、その学校に進学したことがきっかけとなりま

写真(左)同窓会 副会長 大川(羽田野) 愛加(113)
(中央)学校法人聖学院 理事長・聖学院大学 学長 小池 茂子
(右)同窓会 会長 島田 大輔(101)

した。思えばそれが人生の一つのターニングポイントですね。焼津駅から静岡駅まで電車に乗り、そこから学校までは徒歩で1時間15分をかけて6年間通いました。当時の私の生活というのは、キリスト教に真っ直ぐ向かっていくという感じではなかったです。毎日行われる礼拝もそんなに熱心に聴いていたかというそうではなかったと思います。一方で、いつも聞かされる話は自分の中に徐々に刷り込まれていったということも事実だと思います。

羽田野 大学への進学はどうされたのですか？

小池 静岡英和の生徒だった時に、出会った国語の先生にすごく憧れまして、国語の教員免許状が取れる学科、大学に進学しようと決め、結果、青山学院大学に進学したということですね。青山学院大学に進学した当時、生涯学習について研究しようという気持ちは全くなかったですね。

島田 その時の国語というのは、古文ですか？

小池 憧れましたのはやっぱり古典です。枕草子とか源氏物語とか、女子高校生が憧れる世界ですね。自分の好きな領域で教員の資格を取り、生涯の仕事の中で生かしていきたいというのが、高校から大学に進学する当時の希望だったと思います。



羽田野 では大学入学後にその状況が変わるのですか？

小池 青山学院のチャプレンが非常に強烈な個性を持っていらっしゃる方で、私がたまたまその先生のアドバイザーグループのメンバーになって、そこから物の見方が変わっていきました。牧師でありながらも温厚にニコニコ笑って何でも許して下さる先生じゃなくて、「君らみたいな生き方したら人生ダメなんだよ」というようなことをはっきりおっしゃられる厳しい先生でした。当然、私はそれに抗弁するじゃないですか。結局そういう形で色々考えさせられて、最後には、その先生が牧師をされている教会に通うようになりましたが、その教会の方達がすごく歓迎して下さって、温かな交わりがそこにあって。その人達の信仰者としての生き方の中に何か違うものがあるのではないかと考えたことが、私がクリスチャンになったきっかけです。大学2年生の時に洗礼を受けました。

島田 なるほど。国語の教員になる夢はどうされたのですか。

小池 学部の4年間は、教員になることを目指していましたが、大学1年から3年生までの3年間、北海道の社会教育施設で合宿をして地元の高校生に勉強を教えるという学習ボランティアに参加していました。私たち大学生を招いてくれた現地の教育委員会で社会教育主事として働いていた大学OBの姿から、私は多くの刺激をもらいました。当時は社会教育とか成人教育とか生涯学習という新しい教育理念が日本の中に出て

きた頃でもあり、高齢化社会の中でこれから学校教育の外でも、生涯に亘ってみんなが学べる社会を実現していくという理念に惹かれ、これを研究しようと大学院に進みました。

島田 社会教育施設での体験が二つ目のターニングポイントになったということですね。

小池 はい。大学院に行って生涯教育を研究し始めましたら、指導教授が「机上の学問だけでわかったつもりになってはいけない」ということで、大学院に在籍しながら東京都港区教育委員会社会教育課に週3日勤務する社会教育指導員として論文を書く、大学院時代はこのような経験もしました。4年間、成人教育の企画・立案・運営の仕事に携わりました。

羽田野 周りに自分を導いてくださる人がいて次のステップに進めたというのは、私もすごく共感するところです。誰かから誘われ、ボランティアっていうものに触れて、そこから自分がここに行きたい、その人に会いたい、こういう活動をしてみたいという気持ちが湧いてきて、結果的に今の職場にいるので。先生のお話を伺って、そういう環境はとても貴重で大切なものなんだと改めて実感しています。

小池 そうですね。ボランティアもそうですが、そのことが大事だと思う人がそこに集まってくるわけですから、価値を共有するというか、物質的なものも重要だけれどもやっぱり最後は人だよね、みたいなことを体験的に学ぶわけです。また、そこに集う人たちによって自分が支えられることもありますね。

島田 本学のタグラインの「一人を愛し、一人を育む。」をご自身の経験において体感されているということですね。青山学院大学の大学院生から本学に移られた経緯もお聞かせいただけますか。

小池 大学院の博士後期課程を終えた後は、長らく非常勤講師をいたしました。最初の専任校となった大学に在職していた時、青学時代の恩師から頼まれて生涯学習概論の非常勤講師になったことが本学との縁の始まりです。その後2006年、専任講師として着任しました。



§2 新学長としての抱負

島田 ご経歴をお聞かせくださりありがとうございました。次のテーマは、新学長としての抱負、運営方針になります。本学を取り巻く環境などを交えて、先生のお考えをお聞かせいただけますか。

小池 基本的にはこれまで前学長の清水正之先生が大事にされてきた、建学の精神に基づく少人数教育の継承です。またその上で二つの取り組みを進めてまいります。一つは「学修成果の可視化」です。これを実現するための教学システムの構築を目指します。具体的にはポータル

システムUNIPA(ユニパ)を通じて学生が、自分の学修成果の経年変化を一見して把握できるようなシステム改善を進めています。立ち上げられた教育開発センターでは、学生の学修成果の分析を行い、それを踏まえた教育改革をしていくということにも着手しています。

羽田野 「可視化」というのは学生・教員双方においてその成果を定量的に評価することですね。もう一つの取り組みというのはどんなことでしょうか。

小池 大学設置基準の今回の一部改正を受けて、各大学に求められていることは、「厚生補導の充実」です。「厚生補導」とは学生の人間形成を図るために行われる正課外の諸活動における様々な指導、援助等のことです。本学では従来から学生支援を行う部局は大変充実しているのですが、学生の相談に応じる「総合相談窓口」を開設し、そこから適切な支援担当課に学生をつなげることを目的としたワンストップ窓口、通称「フィリア」をこの4月にオープンさせました。



羽田野 場所はどのあたりに設けたのですか。

小池 学生が学内で一番通る場所にしようと、昨年の夏休みにプロジェクトメンバーで全学のキャンパスを歩き回りまして、4号館の学食前に設置しました。相談カウンターの横にはトロフィーの陳列ケースもあるので、活躍している学生をみんなに周知する効果も期待できます。

また相談スタッフが重要であるということで、学生の困りごとだけではなくて元気づけ、さらにやる気を引き出して育てられるような人が良いということから公募の結果、社会福祉士、精神保健福祉士の資格をお持ちの専門職員村田さんに「フィリア」を統括する仕事を担当いただくことになりました。彼女を中心に学生支援課のスタッフが交代でこの相談窓口を担当しています。

羽田野 具体的にはどんな相談に乗っているのですか。

小池 新学期は1年生が、大学の諸機関が分からないということで山のように相談にいられました。その後は利用者の裾野を広げるため「フィリア」を使ってイベントを開催しました。この窓口を通して、オープンキャンパスの学生ボランティアの募集や学生コンシェルジュの養成プログラムが始まっています。

島田 私は高齢者介護の仕事をしていますが、介護のことで困ったら、その地域を担当している包括支援センターという「介護のよろず相談室」みたいなところがあり、そこに相談に行くと、様々なサービスを紹介してくれたり、役所に繋いでくれたりします。フィリアは、介護というところの学生向けの地域包括支援センターみたいな場所だと思いました。

小池 学生から相談を受けた教員が手取り足取り面倒を見るのではなく、学生が自分の足でやってきて、自分の言葉で何をやりたいのか、何の相談に乗ってもらいたいのかを伝えることで、学生の主体性や自立性を育みながら支援をしていく。大学らしい相談窓口にしようというのが、フィリアに託した私の願いです。

§3 コロナ禍後のキャンパス

羽田野 さて、次のテーマはコロナ禍後のキャンパスの様子です。授業の形態や各種イベント開催状況はいかがですか。

小池 全体としてはコロナ禍前に近い状態に戻ってきています。まず授業ですが、今年度は約94%の授業が対面で行われています。一方で、

このコロナ禍で進んだオンラインの技術を使った教育技法を生かしていくという教育・研究に関する実践もあってよいと考えています。今後は海外の大学との提携というのがありますから、国内外の大学と本学をオンラインで繋ぎながら授業や研究に生かしたいと思っています。今年度は学生たちのクラブ活動、そしてボランティア活動、授業も全てコロナ前と同様、現段階では活動制限なしで行っています。

羽田野 コロナ禍の後遺症と言いますか、影響はどんな形でできていますか。

小池 4年生にとっては、1年生から3年生までのコロナ禍の下でオンライン授業や部活動の制約を受けることが続いたことで、自分からアプローチする機会に恵まれないまま仲間ができずに4年生になり、なかなか横に繋がれない、就職活動についても主体的に動けない学生が増えたとも聞いています。

島田 確かに心配ですね。入試の方はいかがですか。

小池 コロナ禍の中でも本学は善戦していましたが、今年度は入学定員を満たすことができませんでした。従来は入学定員の厳格化政策により入学定員規模に応じた上限値が決まっていたましたが、これが収容定員の厳格化に政策が変わったことにより多くの大学が打撃を受けました。

§4 同窓会への期待

島田 入試広報の観点でもブランディングが大切になりますが、広報面でのトピックと言えば「学校法人聖学院創立120周年」です。こちらのプロジェクトはいかがでしょう。

小池 学校法人聖学院創立記念事業として大学では、5月にディスクゴルフ大会を開催しましたし、11月3日には大学院の特命教授で文化功労者表彰を受けられた関根清三先生による学術講演会を予定しています。また、10月28日には学校法人聖学院の全教職員が大学チャペルで記念式典に臨みます。同日の午後には創立120周年を記念して大学チャペルに設置されたパイプオルガンのコンサートが行われることになっています。



島田 同窓会では10月21日に設立30周年の記念パーティーを開きます。

小池 本学には、ホームカミングデーや教育保育を語る会またスーパービジョン等、学部・学科単位で卒業生にご参加いただけるイベントがあります。卒業したらもう縁は切れてしまうのではなく、ご職業上の、あるいは日常生活上の思いをまた古巣に帰ってきて先生たちに報告し

ていただいたり、旧友との再会を通じて、卒業生のみなさんにとっても、繋がっているという思いを抱いてもらえる大学にしていきたいと思っています。また、これからの大学は社会人がもう一度学び直し、資格や専門的な能力を習得する場でもあるべきだと思っています。学士として学位を持った人たちが編入生として入ってくる。あるいは大学院に戻ってくる。このような大学像をさらに推し進めていきたいと考えています。

島田 そうですね。我々も寄付という形だけでなく、自身の学びという形でも支援できればと思います。

小池 私どもの学校法人下には創立100年を越す学校がありますが、どの学校も同窓生がご寄付をはじめ、学校のために様々な貢献をなさってくださいしています。私学はその学校を卒業された同窓生に支えられていくことが非常に重要だと思っています。でもそれは、卒業生が母校に良い想いを抱いていなければなりません。本学はまだ創立35年と若い大学ですが、是非とも大学の将来構想を実現するために、同窓会の皆さまのお力添えを得て、一緒に作り上げていきたいと思っています。

羽田野 学生の頃、石巻の現状を知るため自分たちでお金を集めてスタディツアーを企画したことがあり、今それを思い出していました。現地の方からお金をいただいたこともありました。同窓会や地域の方々に、こういうことをやりたい、今この活動を立ち上げています、という強いメッセージを発信していくことは重要だと思っています。



小池 卒業生のみなさんで自身が聖学院ブランドなんですね。みなさんが立派だと聖学院大学はすばらしいと周りが評価してくれるのです。みなさんお一人おひとりが、聖学院大学で学ばれたことを誇りに持ってください、さらに聖学院大学を勧めていただければうれしい限りです。母校への献金も大歓迎です。

羽田野 がんばります。本日は貴重なお話をいただき、誠にありがとうございました。

学校法人聖学院 120周年特設サイト

<https://www.seig.ac.jp/120th/>



聖学院大学同窓会 公式note

https://note.com/seig_dousou

同窓会の活動や、2023年10月21日に行われる聖学院大学同窓会設立30周年記念パーティーについてのお知らせも随時お届けしております。



写真(右) 学生エンカレッジセンター窓口フィリア 専門スタッフ 村田 明子



聖学院大学同窓会会長の島田大輔と申します。
この度、聖学院大学同窓会は、2023年に設立30周年を迎える事となりました。これもひとえに同窓生の皆様、また教職員の皆様からの多大なご支援の賜物と深く感謝申し上げます。
同窓会設立から30年が経ち、大学設立当初から数えた卒業生数は15,000人以上となりました。その間、元号が平成から令和に変わるなど、社会では大きな変化もありました。私自身は卒業から18年が経ちましたが、今でも同窓会会長として、大学との深い関わりが続いております。大学生活の4年間で得た経験が自分の中で大きなものであり、何か母校への恩返しが出来れば、という思いのも

と、これまで同窓会活動を続けてまいりました。
今年は聖学院創立120周年を迎え、また大学チャペルへのパイプオルガン設置が具現化するなど、節目の年でもあります。大学同窓会では、今後とも在学生の支援活動を柱にしつつ、同窓生の親睦や母校発展に貢献したいと考えております。どうか今後とも同窓会活動へのご賛同、ご協力をよろしくお願い致します。
なお2023年10月21日(土)には、聖学院大学同窓会設立30周年を記念したパーティーが、パレスホテル大宮にて開催されます。詳細につきましては、同窓会ホームページ及び次回会報誌にてご報告させていただきます。



大学チャペルのパイプオルガンが完成間近！

聖学院大学同窓会設立30周年、また聖学院創立120周年、その淵源となるディサイプルス派日本宣教140周年を覚える節目の年に、私たち同窓生の祈りが一つの実を結びます。聖学院大学のチャペルは2004年11月に竣工しましたが、このチャペルに今年10月、念願のパイプオルガンが設置されます。オルガンケースの内部には既に大小さまざまなパイプがセットされ、設置作業は終盤に入りました。現在は10月28日に行われる法人創立120周年記念礼拝に向け、整音(調律)作業が続けられています。
もともと聖学院大学のチャペルは、その設計当初からパイプオルガンを設置する計画があり、設置委員会を通して準備が重ねられてきました。しばらくの時を経て、学校法人聖学院創立120周年記念事業の一環として、大学チャペルにパイプオルガンを建造することになり、念願であったパイプオルガンの設置が具現化しました。オルガンの仕様やデザインの検討が進む中、設

計及び建造を担当するオルガンビルダーとして、ガルニエ・オルガスム(GARNIER Organum) 有限会社と契約を結びました。
ヴェリタス祭の時にチャペルを訪れると、きっとそこには、クラシックで壮麗なデザインのパイプオルガンを間近に見ることができると思います。ぜひこれを機会に、ヴェリタス祭にも足をお運びください。
このパイプオルガンが、私たちの歩みと感謝を賛美の調べに乗せて、これからもずっとすばらしい音色を響かせてくれるよう、心から期待しています。



最近の主な活動



2023年
6月

北区滝野川会館にて
役員による集中会議を行いました。

コロナ禍以前は、例年5月下旬から6月上旬にかけて、1泊2日の研修会合宿として実施してきましたが、今年は新型コロナウイルス感染症対策の行動制限緩和に伴って、予定していた複数の宿泊施設が全て満室で宿泊予約できなかったため、昨年同様宿泊を伴わない集中会議

として実施しました。毎月行われている定例会議に比べ、長時間にわたる集中審議となりましたが、同窓会設立30周年記念事業を中心に、各種活動の現状における実態把握と課題点の抽出、これからの活動方針等について、各役員と意見交換をする事ができました。

2023年
6月

聖学院大学ボランティア活動支援センター／地域連携・教育センター主催の「ボランティア・まちづくり活動助成事業」の公開審査会に審査員として参加してきました。

この事業は、上尾市社会福祉協議会(赤い羽根共同募金)との共催で、地域の課題解決に取り組んでいるゼミ・ボランティア団体等を対象に、助成金を交付するものです。同窓会からは30万円を支援させていただきましたが、助成先の選考と助成額の決定は、公開審査によって行われます。審査会では、聖学院大学で活動するボランティア団体等が、活動を行う上で必要な経済的支援を求めて、プレゼンテーションを行います。発表を聴いた大学同窓会役員、赤い羽根審査員、当日来場した地域の方々(福祉関係者、公的機関、自治会、NPO等)から、それぞれ活動費の助成を受けることができる仕組みになっています。今回、公開審査会に

参加してみて、学生の団体が地域のイベントに出席する等、活動が活発になっている事を感じました。地域と連携し地域課題の解決に取り組む一つひとつの団体が、その活動のあり方について、それぞれ工夫を凝らしている様子が伺えまし

た。どの団体も、SDGsを意識した活動をしており、また発表時に使用するパワーポイントが見やすく作成されていて、活動に対する意識の高さを感じました。今後も活発な活動が行われることを大いに期待しています。

